

BOOKS

『中国近代史研究序説』などの著作を相次いで世に問われたが、これらの著作の基礎となった『中国封建社会の機構』（学位論文）、『中国封建社会の構造』（日本学士院賞受賞）、『中国封建社会の構成』（未刊）の三部作の膨大な調査報告は、氏の中国研究の土台をなしている。

しかし、多くの中国社会経済史学者が、当該分野の研究のみにとどまっていたのとは異なり、今堀氏は、その活きた学問研究の当然の帰結として、やがて中国革命史研究というもう一つの大きな分野に踏み出していった。

しかも、本符Ⅱ『中国研究の資料と史料批判』およびⅢ『現代中国研究』一の『中国革命と『毛沢東選集』の役割』に見られるように、その手法は、中国社会の内面に視座を据え、いわば庶民の立場を重視する問題意識と歴史家らしい精緻な実証主義・文献批判に立脚しており、毛沢東の原著と選集版との差異を通じて毛沢東批判を試みた『毛沢東研究序説』は、国際的にもとくに評価の高い研究であった。『中国の民衆と権力』、『中国現代史研究序説』は、こうしたユニークな中国革命史研究のなから生まれたものである。

さらに今堀氏は、『マラヤの華僑社会』に見られるようなアジア地域研究にまでその研究領域を広げ、こうして中国社会経済史研究、中国革命史研究、アジア地域研究の三つの柱からなる壮大な『今堀中国学』の体系を形成されようとしているのである。

加えて、氏は、ヒロシマの原爆に立脚し、平和運動にもたずさわり、『原爆時代』、『原水爆禁止運動』、『広島・長崎の原爆被害』などの編著を有するが、それは氏の中国革命史研究が『毛沢東思想』の鼓吹や文化大革命の激動にも耐えて動じなかったことと同様に、当今の反核平和運動に見られるような薄っぺらな政治主義やイデオロギー志向とは本質的に異なっており、まさに『今堀中国学』を内側から支えるエトスと共鳴したものだといえてよいだろう。本書のⅣ『日本の進路とヒロシマ』も、そのことを端的に示している。

著者は今日の中国にかんしても、「(中国)現代化の前途は必ずしも樂觀を許さないのである」(本書Ⅲの二「革命後における中国民衆の歩み——包頭工商業の聴取調査——」)と語っているが、この一見平凡な結論も著者の広い研究の裾野と歴史的なパースペクティ

BOOKS

『正論』
1985年
12月号

『今堀中国学』の形成とその特色

『中国の本質をみつめる』

今堀 誠二著

(評者) 東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄

勁草書房
2200円



本書は、中国研究五十有余年の航跡を凝てなお若々しく第一線で活躍されている著者が、古稀を迎えられた一つの節目に際し、現代の中国を考え、改めて日中関係のありようを問い、さらに明日の世界と日本の平和を求めて読者に語りかけている問題提起の書である。

本書のⅠ「七十自述」は、著者の実に味わ

い深い研究回顧であると同時に、平和運動や大学改革に情熱を傾けながら、通俗的な「政治」に阻まれた無念の心情の吐露でもあって、いかにも今堀教授らしい誠実さがほのぼのと伝わってきて感動的だ。

永く広島大学で教鞭をとられた著者は、戦前から戦中にかけての旧満州、内蒙古、華北一帯における社会調査を基礎にして、都市と農村の変動過程とともに視野に収めつつ、中国の村やギルド、つまり農民共同体や職人共同体の実態を分析し、中国の社会構造をトータルに解明しようとした学究として、はやくから学界の注目を集めてきた。

今堀氏は仁井田陞博士の手法に学びつつ一九四七年に刊行した処女作『北京市民の自治構成』以来、『中国の社会構造』、『東洋社会

新刊ダイジェスト

『フランス大革命に抗して』

伊東 冬英著
中公新書・五四〇円

フランス革命というと、人間が民主主義を実現してきた歴史上の、積極的、肯定的要素としてとらえられるのが一般的である。その偏ったフランス革命史だけが日本にもたらされた。他面、つまり、革命の残虐、非情、不合理な点を、ロマン主義の父であり、反革命の絶対王政主義者であったフランソワ・ド・シャトープリアンの生涯を通じて描いたのが本書である。

啓蒙主義の影響を受け、当初は革命に同情的であったが、王政派貴族の首を刎下に下げて練り歩く群衆の凄まじさを目撃して衝撃を受ける。制度の破壊を伴う革命では、破壊が破壊を呼び、結局は無政府状態に陥るだけではないか。

貴族軍の兵士として戦い、亡命貴族としてイギリスで過ごすうちに、その思想は『キリスト教精髄』などの作品として結実していくのである。個人がいかに歴史に関わり合うのか、という点でも興味深い。

『日本語の系譜』

中本 正智著
青土社・二四〇〇円

日本語は北方系の言語だ、いや南方系だ、いやいやそれらが混じった混合語だ、孤絶語だ、日本語の系統に関する議論はまことに騒々しい。近隣の朝鮮語やアイヌ語との関係も必ずしも明らかでない一方で、遠くチベット語やインドのタミル語との近縁がいわれたりする。素人目には、まるで何が何だかわからない。そうした状況を一元的に説明する原理を、この本は提供する。

一つの地域に強文化が現れると、その言語は周縁におよんで、その地に残る。日本の古語が京・関西で消え、かえって沖縄に残っているのは、いい例だ。そのパターンをアジア全域に広げてみたら——と著者は主張する。北方語、南方語、さらにはタミル語と日本語が似ているというのも、中国という強文化圏の周辺に残った、同じアジアの古語だから、と考えればよいのではないか。そのための例証が、また緻密だ。

今まででんでんばらばらにあったものが、ピタリッと全体の中で結晶する。知的な興奮にみちた本である。

フに基づいてただに重い意味をもっている。

私は、文革初期の一九六七年秋から冬にかけて、激動の中国から香港に出てきて暫時滞在していた折、文部省在外研究員として来港された今堀教授と最初にお目にかかり、さらに一九六九年秋から七〇年にかけては外務省特別研究員として一年間を香港で御一緒したのだが、日本総領事館で開かれた勉強会で中

国社会の歴史的諸相についての今堀教授の高麗を拜聴したときの感動は今でも忘れられない。これこそが中国学であり、中国社会の本質に迫る視座なのかと蒙を啓かれたのであった。その氏がいまや体系化されようとしている「今堀中国学」の完成を祈りつつ、それをいかに継承してゆくべきか、という宿題を新たに与えられたという思いで私は本書を読んだ。

現代の世界と二重映しに『メキシコ革命物語』

渡辺 建夫著

一九一〇年から、この物語の主人公パンチ・ビリヤの死の一九二三年までのメキシコ革命が、とくにメキシコ人の一理想とされる「本物の男」の名をさづけられたビリヤの生涯に焦点をあてながら、描かれている。四百年にわたるスペインの植民地下にあって、最も抑圧され犠牲を強いられたメキシコ

(評者) カトリック神父 上智大学助教授

山田 経三

朝日新聞社 980円

に住むインディオ・農民の立場から、革命の展開と意義がわかりやすく語られている。ビリヤだけでなく、農民の大半が大農園内で生まれ育ち働いていた。農民の九十九パーセントは自分の土地を持ちえず、逆に人口の一パーセント以下の家族が、全メキシコの八十五パーセントもの土地を所有し、「大農園

という形で大規模な農業経営を行ない、その地方の政治、経済をほしむに支配していた。」(十頁)

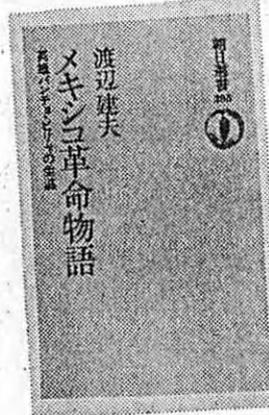
他人の土地に雇われて働く単なる農業労働者(ペオン)は、債務奴隷として、一生掘って立て小屋から逃げ出せず、自らの生命も、家族の生きる権利もすべて、その生殺与奪の権利が大農園主に握られている。こうして非人間的で残酷な状況からの解放を求めて闘う革命の中心が、貧農の子に生まれ、十六歳にして馬賊、山賊として暴れまわるところに、やがて革命家に変貌していった主人公の生き方を通して、よく伝わってくる。こうした革命物語は、二十世紀初頭の話として語られつくされるものではない。被抑圧者インディオ・農民の哀歌は、まさに現在の

ラテンアメリカの現実であり、フィリピンをはじめとするアジア、アフリカ第三世界民衆の現実である。

しかも大農園主らごく少数の特権階級の人による、ほしむままの抑圧の背後には、アメリカ力をはじめとする巨大な外国資本のあることを見のがすことはできない。「この強力な軍事独裁政権の出現をいちはん歓迎したのは、メキシコ駐在アメリカ大使H・ウィルソンだった。……かれほどアメリカの巨大な国力を背景に最大限メキシコの内政に干渉しつづけた男もいなかった。彼は典型的なドル外交の信奉者であり、帝国主義者、革命をさげすむ共和党の超保守主義者だった。」(九八頁)

これはまさに現在のラテンアメリカをはじめ、フィリピンなど第三世界に深く介入するアメリカ政府の姿勢を如実に浮き彫りにするものである。

このメキシコ革命物語は、物語である以上、主人公をめぐる革命家たちの活躍に目がついてしまいがちだが、その行間を読みとることによって、現在進行中のラテンアメリカの民衆の闘いと、その背景を知る上で役に



『なぜ病気はおきるのか』(上)

水谷 弘著 草思社・一六〇〇円

すべての病気を、平均的に網羅した従来の家庭医学の本とは全く違う。ひとの各器官別に、代表的な病気をとりあげ、それぞれの病気のおこるしくみと、からだの働きについて、基礎的な事項を、体系的、総合的にまとめて述べている。

絵本サイズの大型本のせいもあるが、イラストも見やすくわかりやすい。本文の理解の助けだけでなく、イラストページを追うだけでも、各器官の働きがおおよそつかめるように工夫して描かれている。

病名も表層性胃炎や萎縮性過形成性胃炎など、きちんと専門用語を用いている。内容も、専門の事柄にも及び、現代医学の最先端の知識を身につけることができるだろう。

全体的に、かみくだいてやさしく解説されているが、子供だましではない。むしろ、健康は気になるが、医学書を読むのは億劫という、働き盛りや主婦向けにつくられた本かもしれない。

『現代思想のキイ・ワード』

今村 仁司著 講談社現代新書・四八〇円

風呂につかりながらも読める、現代思想への入門書である。ドゥルーズ、ガタリ、デリダ、さらにはアルチュセールと、現代思想と聞いただけでチンプンカンプンなのに、それをここまで分かりやすく解きほぐす著者の力量は、おそろくなみなみではあるまい。

浅田彰もそうだが、「たとえ皮相な形ではあれ、生活を多様化し、多面的に関心を伸ばし、狭くおれをかきらない」という、きわめて明るい思想傾向の一方で、アウシュビッツ体験以後の、希望を見いだせない、暗い、陰鬱な思想の流れも徹してあることを指摘したうえで、そうした文脈のなかに、デイクンストラクション、蕩尽、群衆、暴力、ノイズ、儀礼、全体主義……といったキイ・ワードをキイ・ワードにかかわらせながら説いてゆく。

この本に特徴があるとすれば、「用語集」の無機的な冷たさにおちいることなく、キイ・ワードを生きた思想によみがえらせている点であろう。